

「平和」とは

松元中学校 二年 上野 笑花

「のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくて、とうとうあぶらの浮いたまま飲みました。」

みなさんは、この文章を見たり聞いたりした事がありますか。これは、私が修学旅行に行ったときの長崎の平和記念公園で目にした、石碑にほられた文章です。

今の時代では、油が浮いている水でさえ飲みたいと必死で願うようなことはなく、私は現代に生まれてきた事にとっても幸せだという事を実感します。

しかし、この平和な日本で起きた悲惨な出来事も遠い昔のことではなく、またいつ起こるか分からないという不安から、とても人事ではない恐怖にかられてなりません。

一九四五年八月六日には広島に、そして同月九日には長崎に、原子爆弾が投下されました。爆風と共に、熱や炎に加え、はかり知れないほどの放射能が予想をはるかに超えた範囲で町を襲い、その町の人々を、財産を、建物を一瞬で奪い去りました。きっと、一生で一番長く、そして短かった一日だったことでしょう。衣食住のみならず、家族までもを失った人々は、死ぬことよりも今自分は生きていくということの方が、よほど辛かっただろうと思います。

原爆資料館では、原爆によって変わり果てた様々な遺品、そして全身に大火傷を負った人々や見るも無惨な建物の写真が、限りない程に展示されています。

爆弾投下直後の時間のまま永遠に止まってしまった時計、焼け焦げてボロボロになった衣服……。それらは、原爆が残した爪あととして、私達に戦争の恐ろしさや残酷さを、生々しく訴えました。

そのどれもが、思わず目を覆いたくなるような光景で、この全てが数十年前の、紛れもない日本での現実だと思いと、わたしは言葉を失いました。

これほどまでも、悲惨な過ちを二度と繰り返さないために、今、この幸せで平和な時代を生きている私達は、一体何をしたら良いのだろうか。何ができるのだろうか。

戦争や原爆、核兵器などの恐ろしさや残酷さが風化しつつあるが故に、当たり前前になってしまった平和で幸せな日本での生活に、心から感謝の気持ち忘れず、持ち続ける事。この世に受けた、たった一回限りの命を、何よりも大切にすることだと思っています。そして、戦争で犠牲になったたくさんの方々。この人たちが、今の時代を見たらどのような思うのか？現代の人々は、「平和」という言葉をはき違えてはいないか、今一度考えてみる必要があると思います。

戦争で亡くなられた多くの方々の冥福を祈るとともに、これらの目標が意図することを、私たちがしっかりと理解したうえで、次世代へと引き継いでいくことこそが、真の平和な日本、平和な世界の始まりだと、私は確信しています。